

たけくらべ

—— 映画文学人生論

原作：樋口一葉 (1895年) 「文学界」
監督：五所平之助 (1950年) 脚本：八住利雄
出演：美登利 美空ひばり 撮影：小原穰治
姉 (大巻) 岸恵子 音楽：芥川也寸志
信如 北原隆 長吉 服部哲
正太郎 松本幸四郎 三五郎 中村正紀

廻れば大門の見返り柳いと長ければ

おそまきながら樋口一葉『たけくらべ』を読了した。文学史で名作とされていることは中学生の頃から知っている。登場人物が十四歳の美登利、十五歳の信如、十三歳の正太郎など大人になりかけの子供たちということもわかっていたが、「廻れば大門の見返り柳いと長ければ」——中学生や高校生のころは読みこなせなかった。

では、大人になれば読めるようになるかというところはわからない。「大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申しき」——明治二十八年の浅草を描いた雅文混淆体の文章を味わうためにはそれなりの読解力が必要だ。しかも、今さらこの古めかしい文章を読みこなせるようになって、自慢にはならないし、実用的な価値も期待できない。

明治時代の読者はほんとうに『たけくらべ』を愛読したのだろうか。最初は同人雑誌『文学界』に断続的に発表された。一般読者の反応はわからないが、島崎藤村、平田秃木、戸川秋骨、馬場孤蝶ら若い同人たちには評価されたはずだ。

その後、明治二十九年四月、『文芸倶楽部』に一括掲載されて、好評を得た。『文芸倶楽部』は博文館発行の純文学雑誌で、発行部数は約三万部だったという。現在はこれだけ多い発行部数の純文学雑誌はない。当時の日本の人口は四千万人程度だったという点も考慮すると、文学的教養のレ



たけくらべ

映画文学人生論

ベルは、質、量ともに当時の読者のほうが高かったのではなからうか。

なかでも特に教養の深い大家と目されていたのが森鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨。この三人から一葉は激賞された。

「此作者の作にいつもおろかなるは無けれど、取り分け此の作は筆も美しく趣きも深く」「篇中の人物、みどり、信如、正太郎、長吉、三五郎、龍華寺の和尚など、善くもそれ／＼にそれ／＼の面貌風采を読むものの眼前に在るが如く思はしむるまでに写されしものかな」等。

龍華寺の信如と大黒屋の美登利は横町の育英舎という私立学校に通っている。信如がつまづいて羽織の袂に泥をつけると、美登利は絹はんかちを取り出し、これにてお拭きなされと介抱する。雨の中、信如が下駄の鼻緒を切り困っているところへ紅入の友禅を投げてやる。さりながら、信如は成るだけ知らぬ躰をして、平気をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、・・・。「或る霜の朝、誰かが水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置いていった。誰の仕業かわからないが、美登利はなぜか懐かしい思いがして、違棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめだ。その翌日、信如がある上級学校に進学する当日だという噂が伝わってきた。

石蹴りの子に道聞くや一葉忌 久保田万太郎